



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一一一号(二日発行)
平成十年十二月一日

年表で読む

古平の歴史

《19》

■郡内の道路の様子

明治三年、古平開拓出張所が置かれるようになりましたが、現在の沖町はラルマキといわれていて、明治二年に御木村(おきむら)と改正されましたが、歌棄との間はまだ海岸ぶちの道路がなく、山を越えて通行していました。

また、浜中村(浜町)から新地方面へ抜ける道路も背後の山を越すか、途中まで海岸沿いに来て、波の来ないのを見て磯を渡って通行していました。浜中村の道路も、海岸通りが当時は表通りでした。

■道路や橋の整備をする

明治七年、浜中村も次第に戸数が増えてきたことから、裏通り(現在の一条通り・国道)を

新しくつくることになり、住民にその労働力を義務として申し付けました。ところが、漁場の経営者などからの寄付金も集まり、年内には新しい道路が完成しました。

これに対して開拓使古平郡出張所からは、一同に金五円が酒肴料として下されたのです。

道路の整備にともなって、不完全な仮橋であったチヨベタン川に、長さ六間(約十一メートル)幅二間の板橋をかけたほか、沖村への海岸道路を一部新設しましたが、歌棄村から沖村へ行く途中のチルノフ川にも、深い谷の上に橋をかけました。

■浜中村新開通りを新設する

明治九年、浜中村にさらに新開通り(現在の二条通り)と、

古川(古平川の支流)に橋をかけましたが、これらの費用は広く郡内からの寄付によるものでした。

*古い市街図を見ると、現在の高野民宿と病院の間の道路を新開通り、二条通り周辺を含めて新開町と書いてあります。

■古平と美国間の道路改修

明治六年、古平開拓使出張所が美国・積丹を管轄していたことから、古平と美国間のそれまでの踏み分け道の改修をはじめました。

この道路は丸山のふもとを回って、現在の青峯(あおみね)観音堂辺りからがけぶちを通り群来村に抜ける道でしたが、ようやく人が歩けるほどの狭い道であったと思われます。

明治十三年、それまでの古平開拓出張所が古平・美国・積丹三郡役所となりましたが、郡長を兼務した北川誠一は郡内有志からの寄付を受けて、古平と美国間道路の改修を始めました。

この道路は、現在の丸山トンネルの手前から沢伝えにふるびら温泉の側を通り、さらに沢伝

えに群来町へと抜けるものでした。この道路は、大正のころに美国への新道(旧美国への自動車道路)が出来るまで、ほぼ当時のままの道路が使われていました。

浜中村の架橋工事に寄付

古平郡ノ形町平氏

仲谷清吉

古平郡濱中村古

川、自金堂園餘

差出架橋工事

助奇特、分爲賞

與金水區幸は被い

多事

明治九年九月廿七

開拓使

大正四年

10/7 北海道銀行が整理されることになった。古平で二千株あり、半額になるので十

万円としても五万円の損害だ

10/9 大時化である、共同の浜では薪の流れ出たのが岸に寄っていて、二十から三十

10/10 一昨日来の雨は近年稀である。リングが三百斤程も落ちた

10/11 来る十四、十五日の鐘つき初めの支度で禅源寺では忙しい、芝居、相撲などもあり、ずいぶん賑やかになる

10/14 禅源寺の釣り鐘が入舟町種田家から寺まで行く日だ。好天を念じたが雨が降り出す。十二時頃、種田家を出発、稚児から念仏連中、信徒の行列で賑やかだ、時折り雨が降る、境内では芸者踊りがある、二時頃寺に着く、近來稀な賑やかさであったが、雨の降ったのが惜しかった

10/15 鐘樓の鐘撞きの日な

のに大雨になった。九時頃から空は暗黒になり雷がなり出した、恐ろしいような天気である。ところが正午頃になると晴れ、二時頃から読経が始まり、のち稚児行列がある、正装の僧侶や稚児六十余名、念仏講、信徒で鐘樓を回る、三時に三人の撞初めの者が出て鐘を撞く、大勢の人出で雑踏している、珍しいことだ

10/16 昨日もこんなに晴天

10/16 昨日もこんなに晴天

高野名幸作さんの日記から



【12】

ならずいぶんと賑やかだったろう、美国、積丹方面からも見物人が来る

10/19 父が四時頃起きてちようちんをつけ、鐘撞きに禅源寺へ行く、札幌の共進会へ出品をすすめられたが、今年

10/28 今日、天皇陛下の御真影が余市から富丸で来ると

いうので、町内ではみな国旗を立てている、午後三時頃から暴風雨になる、警戒に消防組も出る

10/29 風で畑のサクランボが根本から折れた、郷社では大木が倒れて屋根にかかり大騒ぎになる

11/10 大正天皇即位当日、父は禅源寺へ行って百八つの鐘を打った、困の前にはアチが立てられ「奉祝御大典」

の菊文字が実に見事だ、門松とほうおう(鳳凰)を飾る、古平一番の飾りだ、見物人が絶えぬ、学校で拝賀式あり、三時三十分、全国一斉に万歳を唱える時間だ

11/14 今日は大嘗祭(おこなめさい)で学校では神社へ参拝に行くというので、子供らは礼装して行く、カレー時期になったのでロープ、網類が出る、市中ではちようちん

をつけて祭日を祝った

11/16 ご大典(記念で、学校では子供たちに紅白の餅を配る、九時から学校で祝賀の宴があり百二十余名が集まる、町長からご大典記念に当たつての挨拶があり、十二時に散会する、二時頃、旗行列が町内を廻り家の前を通る、楽隊もいっしょで賑やかである

11/19 十八日に予定のちようちん行列が延びて、今日ある、仮装行列もあつて学校前で散会する

11/21 『古美新聞』で広告を募集し、料金まで取っておいて本人は行方不明になっていたところ、今日、旭川から『東雲新聞』を送ってきて、よろしくとのこと、何というあきれたヤツだ

11/24 夜、古平座でご大典を記念した活動写真(映画)があるというので見に行く、ご大典というのはほんの呼び物で、高田の馬場、佐倉宗五郎など、弁士が下手で張り合がない、十時に帰る

—— 次号へ続く ——

ふるさと歳時記

古平中学校校歌のできたころ

土口 川 義雄

こん日は絆深まる岸に立つ

平和ほど有難いものはない。

つい二年ほど前まで、明日をも知れぬ戦場にいた者が、生きて再び故郷の海辺に立つことができたのだ。涙ばかり出て困った。

古平の町は忙しかった。

終戦の一月前に、空襲を受けて沈没した、マンガン積み取り船射水丸のマストが、港の中にニョキンと突っ立っていたばかりは、戦争の傷跡は取り立てて見えなかったが、その分、この平和な町に、どうと人口が流入していた。

私が、古平に帰って休む間もなく、強引に役場書記にさせられたころ、ここも戦場のような忙しさで、一人が二つの係を兼務するのが当たり前であった。

十一月、新憲法が發布され、何

が何だかわからないが、戦時中から訓練なれしている町民も学

童も、あっさり旗行列をした。目の廻るような速さで、制度

が変わり、翌年春には、初の民選で、大澤吉三郎町長がで

がったし、秋には、六・三制による中学校の実質初代校長と

して、千葉清一氏が着任した。敗戦後という、暗い時期にもか

かわらず、町は妙に活気があって忙しくて明るかった。

磯海苔の採りかた教え礼言わる

万をはるかに超えて、人口の

ふくれ上がった町には、このころから文化人の往来も多

かった。画家の三雲祥之助、小川マサ子の各氏が、港町の今魁二

郎さん宅で展示会を開いていた

し、今中素友氏（日本画）や、更科源蔵氏など文人、歌人も多く来町していた。

昭和二十二年の秋深いころ、

古平中学校父母と先生の会が結成され、このころから、校歌制

定の機運が盛り上がってきたよう

うで、公募されたのは、翌年正月であったと思う。

決まった時間に、満足に帰宅できぬのが当たり前になってい

た私も、役場の机で、何となく校歌に取り組み始めていた。

モイを焼き夜食の合間稿を練る

大方の仲間が帰宅した、役場は、でっかい石炭ストーブが暖

かく、格好のディスクを提供してくれた。

歌詞の骨格に決めていた、カント哲学の価値観である、真、

善、美を、どう綾取りして表現するか、ほんの少ししか持ち合

わせのない語彙（ごい）の中から表現するのだから、二十五歳

の非才そもそも無謀な挑戦であったし、ましてや、郷党が歌い

続けて後世に残るものともな

れば、私にとって、身ぶるいするほどの壮挙でもあった。

「沢山の応募作品の中から、吉川さんの詞が採用されました。

つきましては作曲が完成次第、発表会があると思いますが、その時はご出席下さい。」

安藤勝夫先生が、勅使みたい

に校歌の歌詞決定を私に告げ、さらに、その盛儀に着用する礼

服がありますかと、心配して下さった。

昭和二十二年二月二十八日その発表会が、新地町の新盛劇場

で行われた。

礼服にこだわりの、自分のを、私に貸そうとする安藤先生のご

好意はうれしかったが、何せ私の背丈が少し高く、着てみると

ツンツクテン。ままと、海軍で着ていた三種軍装が、その日

の私の盛装となった。

潮の音に海は明けたり……。万感の思いを込めて、書き出し

の一行を書いているから、五十年の歲月が流れている。

郷党の若々しい生命が、今も歌ってくれていると思うと、身の引き締まる思いがする。

▼川崎船で余市往復

明治以前は運上屋、或は鯨漁場などが自分のところの船を使つて、余市までの往來をしていました。明治十五年左右沢江村の保木嘉七が、古平・余市間を川崎船で回船業をしていたとい

III

帆をかけ、二丁の櫓(ろ)をこいで往復していましたが、その後、焼玉式エンジンを付けて明治の末ころまで営業していたそうです。

▼古余丸が就航

明治三十二年ころ、余市郡湯内村(現在の豊浜町)で漁業をしていた

小黒某と、古平郡

港町の小町泰治郎が共同で、木造船の古余丸(九九ト)という汽船を買い入れ、鯨時期には鯨の粹船引きに利用し、その後は余市・古平間の航路に就航しました。

鯨漁がますます盛んになり、

定期船が消えて40年

明治から大正時代 古平沿岸の海運

貨物や人の往來が多くなるにつれ、交通の不便なことが大きな問題になってきました。特に冬期間は陸の孤島でした。

▼古英丸が就航

大正二年、鯨の千石場所といわれたローソク岩付近に漁場を持っていた沖村・田岸

貞治が、港町・小町泰

治郎と共同で木造汽船

古英丸(九八ト)を

買い入れ、やはり鯨粹船

引きに使用していまし

たが、その仕事が終わ

ると、古英丸は余市・

古平間の航路に就航し

ました。船長は野崎繁

蔵という人でした。

(先の古余丸との関係

がわかりません)

古英丸はその後、大

正八、九年ころ売却さ

れました。

▼余市・美国間に定期航路

大正六年、余市町・甲谷定次

が、発動機船富丸(約三〇ト)

で余市・古平・美国間の定期運

航を始めました。これは古平、

美国両町の住民だけではなく、

(5ページより続く)

絶命の極限状態の中で、短くも激しかった青春の全てを燃焼させ、サハリンの大地に若くして散華した彼に、戦いが終わっても何もしてやれなかった私の無力さを詫びた。

◆(この稿終わり)

入舸・余別村方面の住民にとつても大きな朗報でした。

この定期船の運行が歓迎され利用客が多かったことから、富丸の運航から五年後の大正十二年、同じ余市町の小原楠次郎が末広丸(二十ト余り)を同じ航路に就航させました。

▼乗客の争奪戦が始まる

定期船が二隻になったことでさらに便利になりましたが、今までは航路を独占していたところへ競争相手が現れ、両者の競争意識は相当激しいものがありました。

まず料金の値下げが始まり、それに景品として手ぬぐいなどが配られるようになりました。また、余市駅前では客馬車が待っていて、荷物には料金がかか

(6ページより続く)

仰していた人たちが老齢化したしたこともありすが、漁業に従事する人が少なくなりました。港内にも以前のような大型・中型船の姿はなく、小型船だけが目立つようになりました。

また、今のふるびら温泉のところに新地分教場が建っていて、お祭りを盛り上げていましたが、その後の高校もなくなっ

てしまいました。だんだん観音さまと、町内の人たちとの関係が薄れていったようです。

近くにはふるびら温泉もあるこ

とですから、お祭りを盛大にし

て、観光にでも結びつかないも

のかと思ったりしています。

帰りは副住職さんの車に乗せ

ていただき、海上安全、大漁祈

願で賑わった音さまの復活を願

いながら帰途につきました。

◆

りますが客は無料です。乗船場まで運び、客の争奪合戦は次第にエスカレートするばかりでした。



追憶の記

遙かなる故郷の思い出

[51]

橘 義 春

④

わが軍の猛反撃に対し、ソ連

軍は劣性を挽回すべく五百人余りの兵力をさらに増強し、両側から挟み撃ちにする攻撃を仕掛けてきた。夕刻になって、わが軍は敵に包囲されてしまった。今はこれまでと覚悟を決めた泉沢少尉は、部下を率いて半田川を強行渡河し、敵の背後をつく作戦をとったが敵の集中砲火を浴びて、部下と共に壮烈な戦死をとげた。

一方大国小隊は機関銃、速射砲も破壊され、残存兵力は優勢な敵の包囲下にあった。ついに大国少尉は切り込み攻撃を決意し、負傷兵を後方に離脱させてから、「泉沢少尉の仇をとる」と言つて、手りゅう弾を握つて敵陣に果敢に突入し、壮烈な戦死をとげたのである。こうして大国、泉沢の両小隊は玉碎した

のであった。

後に、ソ連軍の戦史に、緒戦における日本軍の猛烈な反撃についてこう記されている。

「第五十六狙撃軍団の主力前衛部隊は、日本軍の猛烈な攻撃を受けて前進は頓挫した。わが前進経路は、多数の低伸弾道火器による濃密な火網にさらされ、身動きが出来なかった」

日本軍が僅か百人ぐらいの小兵力で、一個軍団のソ連軍の侵攻を国境線でくい止めた力戦ぶりは敵にも恐れられ、戦車はよろか、対戦車砲も持たない日本軍の勇戦ぶりは、ソ連軍の師団長をも驚嘆させたのである。

昭和二十年八月十九日、ソ連軍と停戦協定が成立し、悪夢のような戦いが終わり、連隊全員が屈辱的な捕虜となった。

捕虜収容所で、四中隊の赤間

清伍長（伊達市出身）から突然声をかけられた。彼は、半田陣地の守備隊の生き残りであることがわかった。そこで、初めて戦友である佐藤清の戦死の悲報を聞いた。まさか戦死とは——私は、彼はまだどこかに生きていると信じていた。停戦後、生き延びていた兵隊が、大勢ソ連兵に連行されて来ているので、それに期待していた。

赤間伍長の話によると、佐藤清は最悪の事態を予期して、暗号の乱数表などを焼却し終わつて、怒涛のように攻め寄せて来るソ連軍を相手に勇猛果敢に奮戦中、肩に敵弾を受けて重傷を負ったが、「やるんだ、やるんだ」と、なおも闘志を燃やしなから、赤間伍長に見守られながら息を引きとったという。彼らしい立派な最後であった。

彼は炭鉱の町で生まれ育つたので、子どものころの遊び場はボタ山かその周辺で、海で遊ぶだということがなく、小さいころから海に強いあこがれを持っていた。将来は海の男、船乗りになりたいという希望を持って

いた。私が海育ちなのを、彼はとてもうらやましく思っていたらしい。古平の海での釣り、磯遊び、アワビやウニを採った話など目を輝かせて聞いていた。

彼とはこんな約束をしたことが思い出される。あと一年か、一年半で召集解除になり除隊したら、その時はいっしょに帰つて、古平の私の家に何日でも泊まり、青い海を見せてやろう。海で泳いだり、釣りをしたりして、海の楽しさを十分に満喫してから、また、古巣の東京へいっしょに出ようと。

彼は、東京が大好きだと言っていた。彼には東京に大きな夢があったはずだが、戦争が一人の若者の人生を失わせてしまった。運命とは残酷なものだ。

それから四十六年後の平成三年八月、私は、樺太戦没者遺骨収集政府派遣団の一員としてこれに参加した。

八月三十日、念願の半田陣地跡で、佐藤清が散華したと思われる場所を発見、持参の花束と線香を捧げ、戦争という、絶体（前ページ3段目へ続く）

亡夫を思い
余生を楽しく

渡辺ハツエ

夫が他界してからはや二年が過ぎました。私は近親の皆様をはじめとして、子どもたちに支えられながら今日まで元気に過ごして参りました。

かえりみると、亡夫は明治四十四年に古平町に生まれ、このた、息子の最初で最後の親孝行であつたと思います。

丸山青峯觀世音

竹
内
コ
ト

す。自分の親ほどの年齢の差のある先輩と、和船で櫓（ろ）を漕いだ時代から、船外機の舵（かじ）をにぎつての長い歲月には、つらいことも悲しかったこともたくさんあったことと思われませんが、その反面、喜びもあったことと思います。

漁師になって、初めて「いか釣り」をして得たお金で、母親に金歯を入れたあげたことを、

私は、あらためて親子の絆を
ほほえましく思いました。そし
て私は、親孝行のできた亡夫を
うらやましくも思ったものでし
た。

私はこれからも、「かえりみる来し方亡夫の在りしころ」の心境で、健在だったころの亡夫をしのびながら、元氣に余生を過ごしたいと思っております。

亡き夫の使いこなせし漁具なべて思い出と共に納屋におさまる
わが里に湧き出て賑わう温泉に温もることなく夫は逝きたり
この朝の遺影の夫の目のやさし一汁一菜の二人のお膳
亡き夫の来りし日日を語るごとき賞状額がわれを見守る
亡き夫の好みし浪曲番組のあればラジオを仏間に運ぶ
字のうまさ親の血を引く夫の逝き達筆見事な表札残る

睦の場ともなっていました。

境内の周辺の草はきれいに刈られて、昔の賑いを見せて名残があります。人出の少ないのが何といっても寂しいことでした。

きました。今現在も浜の人たちによって、ねんころにお祭りが行われています。

私もお参りの日に行ってみましたが、昭和三十七年に奉納された紫色の幔幕（まんまく）が、

禅源寺の副住職さんが見えて
おつとめが始まり、ひとりひと
りがお払いをしていただきまし
た。厚い經典で、ていねいに厄
を払ってくださいました。

すっかり灰色に変わっていましたが、お詣りに来る人たちの心は昔と同じでした。みんな昔を

私は、どうしてお詣りの人がこんなにも少なくなつたのかを考えてみました。もちろん、信

←(4ページ下段へ続く)

魚の歳時記あれこれ

吉平ホトトギス会

福井 幸平

鰯鍋の囲む夕餉のぬくまれる

こう寒くなると、鍋ものが何よりのご馳走である。

鍋焼きうどん、わが家別製の鍋焼きうどん、大変おいしくいただいた。これからは何といつても鰯かしらである。古平に住んでも、最近鰯のかしらもなかなか手に入らないようです。

私も若い時は肉、今は魚が好きになって、それも身より魚の頭とか内臓、ペロペロした皮とか目玉とか、その魚によつて味わい深いものがある。

さて、鰯について北海道新聞社が出している歳時記に、ある魚学者が一メートルほどの鰯を解剖したら、ホッケ、カレイ、イワシのたぐいから、カニ、エビ、タコ、そのほかイカモノに近いヤドカリ、イソギンチャク、ヒトデ類まで、百種類ほど

の動物が出てきたそうで、魚肉に深い味のあるのは、こういう多種類の生物のエキスがミックスされて、体内に入っているからだという。

鰯は口が大きいから、目に見えるものはすべて腹の中にほおり込む。「タラフク食べる」、「矢鰯に食う」という俗語は鰯の習性からきたものだ。

また、〇〇の鰯嫁に食わすな、と言うほど昔から美味である。同じ鰯でもスケソウ鰯は、やせてほっそりとしているから、やせてヒヨロヒヨロしていると、「あいつスケソのようだ」と言われる。

鰯船の一つ還らぬ吹雪かな

凍鰯や大いなる口をあきしまま
鰯 鷺 蕪 秋

独り居の又温めるおでん鍋

斉藤波留

三所帯女集まる大根漬け

仲谷比呂子

札幌のササラ電車の試運転

仲谷安代

漁早く切上げ村の祭り見に入植の積丹原野そばの石

大和田絵伊

すずかけの秋高く古い旧校地

仲谷美砂

雪の上散り遅れたる紅葉かな

水見句丈

通り雨紅葉の艶の戻りける

福井幸平

蛸煮上げ冷ます仕掛けの扇風機

山口悦子

折角の昼寝をさますチャイムかな

大島喜恵

夕餉まで少し間のある端居かな

山口浪

栗貫う亡妻の笑顔の見えしかな

岩瀬みのる

鮭漁の間近なりし番屋かな

越野敏雄

ふるさとの神のさかなや鮭のぼる

越野清治

墓参り年に一度の顔と逢う

西島サツ子

月祀る穂芒孫と摘みに来し

外山俊久

ひこうきの下に大きななつの海

中村樺宵

あたらしいともだちできたなつやすみ

小水見玲央

吉平町岬短歌会十一月詠草

長崎 フユ

めざめしはいつもの時間雨か雪か長靴はいて散歩できるか

竹内 コト

舗装路の罅のわれ目につまづきてよろめくはずみにサンダル飛ばしぬ

池田 テル

センターにわれらビーズをつなぎをり玉のれん作ると気負ひたのしく

東 美知

ひまはりを小庭に咲かせ楽しむに種をあさると雀群れきぬ

榭 佳代

喜寿の祝ひにウールの掻卷メッセージ等々町の心づくしありがたし

鈴木 時子

牧場に氷雨の降りて樹の下にま黒き牛ら寄り合ひてゐる

丹後 初江

三世代の女並びて十五夜の山より昇る月を眺めぬ

菅原 節子

大根にてつくりし千枚漬頂きぬうす紅色のはざはりよろし

奥山 きよみ

刈りあとの稲田に下りて群鴉声にも啼かず餌を漁りをり

堀 典子

人行きて今も足跡残れると思ひて月を夫と眺むる

田中 香苗

蛇の出るこの温泉は良く効くと湯治の客の話楽しく

山口 スエ

寒くなりし流しの棚に玉ねぎひとつ置かれてありて今ゆたかなる

金杉 すみ

送り来し新茶ふふみて思ひ出づ君が幼き頃の笑顔を

北 政道

核の傘アメリカさんが頼りです

敬老の言葉の裏にある孤独

老いてゆく介護する人される人

石井 愛子

手の内を良く知っている老夫婦

毒ダミに明日の達者をつんでいる

負ける時全勝力士のパビプペポ

渡辺 ハツエ

かえりみる来し方亡夫のお在頃

秋始末雨と年齢とに逆らわれ

